

今年是国内最後の内戦「西南の役」が終結し、「西郷隆盛」が没して一四〇年となる節目の年です。

西郷隆盛は明治政府の要職から退き、鹿児島に帰郷してから幾度となく霧島市を訪れています。今回は隼人町の日当山に滞在していたときの逸話を紹介します。

西郷と日当山

明治政府の^{※1}参議兼^{※2}近衛都督であった西郷隆盛は、明治六（一八七三）年に起きた^{※3}「征韓論」を発端に大久保利通らと対立。職を辞して鹿児島に帰郷しました。

帰郷後は、県内の温泉地や猟場をよく訪れます。とりわけ日当山には好んで滞在していました。その理由は、次のようなことが考えられます。

- ① 泉質が良く、温泉の数が豊富
- ② 霧島山など風光明媚な地
- ③ 良好な猟場が多くあった
- ④ 海や川などの水産物が豊富で美味
- ⑤ 住民の情が厚く、人が良い

西郷隆盛は幕末の動乱期から明治維新にかけて、命を懸けて明治維新の偉業を成しました。ふるさとの温泉と狩猟はその疲れを癒やすものであり、西郷どんにとって日当山は楽天の地だったに違いありません。

滞在中は、地元の人々との交流が多くあったようです。その証拠に日当山には、西郷どんにまつわるさまざまな逸話が残されています。次の2つの逸話は、昭和十八（一九四三）年に元西

西郷隆盛と霧島

その④

日当山に残る西郷逸話

国分村長（現隼人町）であった、三島亨氏の著書^{※4}『日当山温泉南洲逸話』から抜粋したものです。

その一「翁のウサギ狩りの場所」

南洲翁（西郷）が日当山でウサギ狩りに行かれた場所は、大変広い範囲でありました。その中でも多く行かれた所は、新田山の落シ谷、二ノ宮谷、前迫、後平、鼻切などであった。それから上野、朝日、弓削岡などか

ら、加治木、溝辺境までおいでになり、北は西光寺、糸走りから、表木山、嘉例川辺りまで、前は姫木の城、松永、小鹿野、郡田、山之路から、清水城、国分城、上井城、川内浦までの四方数里にわたり、隈なく行かれた、ということである。

そして、先生はあんなに肥満な体であるのにもかかわらず、山野の歩き方はなかなか達者で、犬と一緒に駆け回り、人夫（労働者）たちは追い付けな

いほど速かった、とのことである。（故・朝倉七郎氏の話）

その二「角力ご奨励のこと」

先生は大変角力好きであった。諺に「好きこそ物の上手なれ」とあるように、角力好きの先生は、肥満の体軀でありながら角力に精通され、並々ならぬ好き上手であった。薩摩藩江戸藩邸に福井藩士の^{※5}橋本佐内が訪問した時、若い藩士と角力の真つ最中だった話是有

名である。

ここ日当山でも、ウサギ狩りの帰り道などで、青年輩が集まっていたら、よく角力を取らせて、先生は見ておられたそう。ときどき天降川の砂原に青年を集めて角力を取らせ、取組、体構え、投げ手など、細かい方法を研究指導され、ご自分は夢中になって見ておられたが、後で先生も見てばかりでいたたまれずに、「それ、わしを押ししてみやれ」と、ハリ（押しやり角力）をして押させられたことが度々あった。（朝倉秋丸氏などの話）

西郷どんは肖像画のようになりつつはいましたが、これらの逸話から機敏でもあったことが分かります。幼少期の郷中教育を思い出したのか相撲に夢中になるなど、西郷どんの人となりがよく分かる逸話です。

（文責 鈴）

※1 閣僚を指導する役職。

※2 天皇直轄の軍の総指揮官。

※3 明治初期、武力で朝鮮を開国しようとした西郷隆盛らが唱えた主張。

※4 平成元年、藤原三千尋氏によって現代風に編集され再刊した。

※5 西郷と親交があった。福井藩主、松平春嶽（しゅんかく）の側近として登用された。第十四代將軍の後継者問題に介入したことを問われ、安政の大獄で斬首された。